

## 第9回美術品梱包輸送技能取得士認定試験の実施について

博物館・美術館に展示される貴重な美術品・文化財等の取扱いや、その梱包輸送には、特定の知識・技能が必要だが、ベテラン作業員や古参の学芸員が定年退職し、後継者養成に困難が生じている。他方、国公立の博物館・美術館では、競争入札で、経験のない梱包・輸送会社が落札し、美術品等が毀損されるような事態が懸念される。そこで、後継者に技能継承のインセンティブを与え、より多くの梱包・輸送業者の技術水準の向上を図るとともに、技術が未熟な運送会社への落札を回避できる方策として設けられたのがこの認定試験である。

日本博物館協会では、平成24(2012)年から、この認定試験を実施しており、この度、9回目の認定試験を実施したので、報告する。

### 1級の認定試験

令和元(2019)年度も、1級試験は夏枯れの期間である8月3日土曜日に実施した。

1級は、全ての分野の作品について、所有者・学芸員の指示の下、独立して取り扱うことができ、取扱いの難しい作品の梱包設計が行える水準を想定しており、経験年数10年以上と2級の保有を受験資格にしている。試験は筆記試験と口頭試問で、全て黒田記念館で実施した。

受験希望者は15名で、5名に辞退をお願いして、10名で試験を実施した。

筆記試験は、東京国立博物館平成館考古展示室に展示されている国宝の埴輪掛甲武人を群馬県立歴史博物館に輸送し、展示会後返却するに際し、その下見において、留意すべき点と、留意すべき理由を記述する問題が出題された。試験時間は90分、60%が合格の基準である。合格者は3人だった。

午後の口頭試問では、唐招提寺蔵 国宝 廬舎那仏(像高 304.5 cm 重量 470 kg)を唐招提寺から東京国立博物館に往復輸送する際の諸問題や、トラブル時の対応について、面接官からの質問に答えてもらった。1人30分間で、梱包設計の詳細について問うとともに、技術集団を統括し、きちんと説明することができる人物であるかどうかを審査した。合格者は7人だった。

両方に合格して1級を取得したのは10人中3人と、昨年度の4人を一人下回る結果となった。

### 2級の認定試験

2級の認定試験は、令和2(2020)年2月15日土曜日と16日日曜日、東京国立博物館の平成館と黒田記念館で実施した。この試験は、全ての分野の作品について、所有者・学芸員の指示の下、独立して取り扱うことができ、現場で作業員の監督ができる水準を想定しており、経験年数5年以上で、3級を保有してい

ることを受験資格にしている。筆記試験、実技試験、面接があり、実技試験は梱包の基礎である陶磁器と、特有の基礎知識を必要とする茶道具を課している。

面接試験に合格して他の試験で落ちて、再受験する者については、面接試験を免除しているが、面接免除か否かを問わず、1日目、2日目ともそれぞれ30人の定員で募集した。応募総数は51人だったので、ほぼ受験者の希望通り、1日目に26人（うち欠席1名）、2日目に25人に受験してもらうことができた。

2級の認定試験は、東京国立博物館平成館での実技試験から始まる。実技試験の際のチェックポイントは、受験者の研鑽に資するため、博物館協会のホームページで公表している。ただし、合否の判定は、このリストにある項目の得点や減点によるのではなく、審査員の目を見て、「この受験者に作品を任せられるかどうか」を基準にしている。

茶道具の実技は、箱に収まっている茶碗を取り出し、コンディションをチェックして、内梱包して箱に戻す作業を求めた。不合格者は4人だったが、1名を除く全受験者に対して、「全体に御物袋の扱いに不慣れである。風呂敷の扱いも不慣れで、きれいに仕上げられていない。」というコメントが担当審査員から出されている。陶磁器の実技は、綿布団を作製して、内梱包を行うことを求め、7人が不合格だった。

午後に実施する筆記試験は、博物館協会の編集で出版している「博物館資料取扱いガイドブック」から出題する。博物館資料の取扱いや梱包・輸送、保存について多肢選択式で回答を求めるが、該当する選択肢がなく、「なし」と答える「ゼロ回答」の問題も含まれる。回答時間は前回から、それまでより10分間短縮した50分で、32問。65%の正解が合格の基準である。今回も、黒田記念館で実施したが、2名の不合格者が出た。

筆記試験の後に、同じ会場で講習を実施した。内容は、主として午前中に行った実技試験の振り返りを行った。

講習の後の面接試験も、全て黒田記念館で実施した。コミュニケーション能力と指導能力の確認を主目的として実施している。今回は全員合格だった。

所要の試験全てに合格し、2級の認定試験に合格した者は、受験者51名中40名、合格率は78%で昨年の71%を上回った。

### 3級の認定試験

3級の認定試験は、2級試験と同日、2級試験と併行して、東京国立博物館の平成館と黒田記念館で実施した。

3級は、需要が多く比較的取扱いの容易な陶器、額装作品、掛物などを所有者・学芸員の指示の下、独立して取り扱うことができる水準を想定し、2年以上の経験を要求している。筆記試験と複数の実技試験を受け、全ての試験に合格することが3級認定試験合格の条件となっている。

定員90人に対し、受験希望者数は104人で、今回も人数の調整をお願いした。この場を借りて、ご理解ご協力に感謝申し上げます。なお、3級では、筆記試験に

合格して実技試験で不合格だった受験者が再受験する場合、筆記試験を免除しているが、今回の筆記試験免除者は15人で、本人の希望の方の日に受験いただいた。

午前中に実施する筆記試験と講習は、今回も黒田記念館で実施した。筆記試験の第1問は、自習用ガイドブックの第1章「美術品の取扱いの基礎知識」の1部を示し、空欄に入る語を選択する問題。第2問は、掛物、卷子等の矢印で示す部分の名称を、選択肢の中から記号で答えるとともに、読み仮名を記す問題を出題した。今回も70%の正答を筆記試験合格の基準にした。受験者90名(うち欠席1名)中、不合格者は1名にとどまった。

筆記試験に次いで同じ会場で講習を行い、実技試験で実施する額装作品、陶磁器、掛物の模範的な梱包作業をビデオで示し、解説した。今回使用したビデオは、有志の委員がこの認定試験に合わせて作り直して令和2年2月に発表した新しいビデオであり、博物館協会のホームページで公開している。自学自習にご活用願いたい。

午後に実施する実技試験は、全て東京国立博物館の平成館で実施した。かつて表慶館等で実施した際は、暖房が効かず、受験者にも審査員にもご迷惑をおかけしたが、平成館は十分に暖房が効いており、助かっている。

額装作品については全受験者が15人ずつに分れて受験した。掛物と陶磁器は、予め振り分けられた班により、いずれかを受験し、各自2種目受験した。額装の実技試験では、6号の額装絵画を、国内輸送用に段ボール箱を作製して梱包する。陶磁器では、与えられた綿布団を使用して内梱包を行う。掛物では、箱から出して壁に掛け、降ろし、内梱包することを求めた。

実技試験の可否の基準は2級と同じだが、額装については、作業効率も求められることから、制限時間(額装の場合40分)以内に作業が終了できない場合、一律に不合格としている。他の作品分野では、制限時間内に作業が終わらなかった場合、一律には不合格とせず、総合的に判断している。

実技試験の不合格者の数は、額装は90人(うち1名欠席)中13人、陶磁器は48人受験して6人、掛物は42人(うち欠席1名)受験して7人だった。

この結果、所要の試験に全て合格し、3級の認定試験に合格したのは、受験者90人中68人で、合格率は77%と、昨年と全く同じであった。かなりコンスタントに合格者を出せるようになってきたことを喜ばしいと考えている。

## 今回の認定試験の反省

4月に今回の認定試験の反省を行うための委員会の開催を予定していたが、新型コロナウイルスの感染防止のため、中止して、メールで反省点を募ることにした。

今回の反省点は、受験者の会場間移動に付き添うスタッフが確保できなかったことである。認定試験の前に、大きな戦力になっていた博物館協会の職員が

何名か退職され、その穴が埋められなかったためであるが、予め注意喚起も行わず、受験者にご迷惑をおかけした。この場を借りてお詫び申し上げたい。

本認定試験も9回を数え、実施サイドはかなり当日のオペレーションに慣れてきたためか、この外には、大きなトラブルの報告は受けていない。細かい要改善点は記録してあるので、次回以降の試験の改善につなげて参りたい。

試験の合格率が上昇しており、特に筆記試験の合格率が高くなっていることは喜ばしいが、中小規模で、社内で美術品取扱いの研修が実施されていない企業からの受験者で、実技試験に続けて不合格になっている例が見受けられる。

不合格理由の大半は、全体に取扱いに慣れておらず、不安を与える。動作がぎこちなく、危うさがある。取扱いに不慣れであるために時間がかかり過ぎている。取扱いが荒っぽく、丁寧さが不足しているといった、熟度に関わる理由である。

認定試験のチェックポイントや、3級実技のビデオを博物館協会のホームページで公開し、3級実技のビデオは認定試験に沿って作り直すなど、独学の方の用に供している。ご活用の上、練習を繰り返し、習熟頂くことを願っている。

公立博物館における美術品梱包輸送の公開入札において、3級有資格者を有する業者であることを入札条件とすることが一般化されてきたことを、喜ばしく受け止めている。

新型コロナウイルスの感染防止のため、受験のための移動や、多人数が集合して行う試験は、従前どおりには行えなくなっている。感染の状況、国や都道府県の方針等を踏まえ、時期をずらし、人数を制限することはあっても、この認定試験は継続して実施して参りたいと考えている。